

## CPASセミナー・シンポジウム参加記

2021年7月7日開催

Brian Dirck, “Abraham Lincoln, Reconciliation,  
and the ‘Better Angels of Our Nature.’”

2021年7月7日、フルブライト招へい講師ブライアン・ダーク (Brian Dirck) 氏による「エイブラハム・リンカーン、和解、そして「我々の本性に潜む、よりよい天使たち」(Abraham Lincoln, Reconciliation, and the “Better Angels of Our Nature”)」セミナーが開催された。<sup>1)</sup> アンダーソン大学歴史学部教授のダーク氏は、南北戦争期の法制史・憲政史の専門家で、これまでリンカーンの生涯に関する数々の著作を発表してきた。彼は現在、アメリカ・ナショナリズムの様相を、19世紀そしてリンカーンに焦点を当てながら包括的に検討することを計画しており、本セミナーはその試みの一つと位置付けられる。

ダーク氏の講演は、南北戦争というアメリカ史上最大の内戦と、2021年1月6日連邦議会議事堂襲撃事件に象徴される現代アメリカ社会の“分断”に重なりを見るアメリカ知識人の傾向を強く反映していた。リンカーンは危機の時代の代表的存在である。彼が大統領に就任した時、連邦は奴隷制を巡って分裂していた。ダーク氏は、リンカーンがアメリカを「実験」と呼んだことに着目し、当時連邦が共和制国家として存続するかは未知数であったことを指摘する。<sup>2)</sup> その不安定さは現在の政治体制にも通じるものがある。同時に、リンカーンは和解の象徴でもある。ダーク氏によると、現代アメリカ社会において、リンカーンの名前や演説は分断を乗り越え互いを許しあう見本として言及される傾向にあるという。しかしダーク氏は、こうした安易な偶像化を批判し、様々な欠点を抱えた人間として、そして経験を重ね何度も変化を遂げた政治家リンカーンの軌跡を重要視する。

ダーク氏が注目するのはリンカーンの1861年第一期大統領就任演説と、1865年第二期大統領就任演説である。この二つの演説はどちらもリンカーンが和解を訴えるものであるが、ダーク氏は、その内容は4年間ではっきり変質したと論じる。そしてその変化に和解の難しさ、そして現代アメリカ社会が抱える困難が見出せるという。ダーク氏はまず1861年の就任演説の本質を、奴隷を保持する南部白人に向けて融和を呼び掛けるものであったと解釈する。リンカーンの政治的地盤は脆く、就任までに深南部に位置する諸州は離脱を宣言していた。そこでリンカーンは奴隷制廃止に立ち入ることを避け、南部白人との対話を試みた。ここでリンカーンが言及した「よりよい天使たち」とは白人同士の親愛を指し、同じアメリカ

<sup>1)</sup> 本稿におけるリンカーン演説部分の翻訳は高木八尺・斎藤光訳『リンカーン演説集』(東京:岩波書店、1957年)を参照した。ただし“Better Angels”部分の高木・斎藤訳は「天使」と単数形になっているが、原文が複数形であることから「天使たち」としている。

<sup>2)</sup> ダーク氏はゲティスバーグ演説時のことと指摘したが、当該演説には“Experiment”という言葉は使われていない。正確には南北戦争以前に執筆された原稿からの引用ではないかと推察される。

人としての感情を呼び起こすことで連邦の結束を復活させる狙いがあったという。1865年の第二期大統領就任演説では、その白人間という限定的な融和が一変する。この時期までにリンカーンは奴隷解放宣言に署名し、連邦軍の勝利は目前となっていた。ダーク氏は、リンカーンがこの就任演説で、白人が戦争で流した血を奴隷制という罪の報いとして捉えていたと見なす。ダーク氏は更に、現在でも語り継がれる「なんびとに対しても悪意をいだかず」という有名な句が、実の所南部白人だけでなく、黒人にも向けられた言葉であると読み解く。そしてリンカーンが奴隷とされた人々への正義を何らかの形で果たす可能性があったのではないかと考察した。

ダーク氏の解釈の妥当性を検討するのは困難である。それは本人も言及するように、この演説の約1か月後にリンカーンが暗殺されたためである。奴隷制や奴隷解放に関する態度と同様、リンカーンが目指した南部再建には様々な矛盾点や時の経過による変化があり、研究者の見解も分かれる。そのためリンカーンによる戦後処理がどのようなものになりえたか論じるのはさほど建設的ではないだろう。ここでダーク氏の議論の意義を理解する補助線となるのは、実際に少なくない黒人たちがリンカーンの演説を自分たちへ向けられたものと受け止めたことではないだろうか。ダーク氏が論じたように、リンカーンは暗殺直前、黒人参政権の可能性を公に認め始めていた。1865年7月25日、ルイジアナ州の自由黒人による『ニューオーリンズ・トリビューン』紙は早くも「なんびとに対しても悪意をいだかず」を引用、「過去の過ちを許し、忘れ、神を信じる」ことで、普通参政権獲得という「共通の願いが叶うだろう」と議論している。<sup>3)</sup>

講演後は、リンカーンの人種観、国家観、演説などに関する活発な質疑応答が続いた。奇しくもバイデン政権の誕生によって、“分断”の乗り越え方が再び議論されている。21世紀の和解が再び白人間の融和に落ち着くのか、人種的少数派の声がどのように汲み取られるのか、アメリカは再び岐路に立っている。ダーク氏の講演は南北戦争研究の重要性を改めて指し示しただけでなく、危機の時代の指導者であるリンカーン大統領がいかに現代アメリカ社会を貫く想像力の源泉となっているかを示す講演であった。

(山中美潮 同志社大学)

<sup>3)</sup> Veritas, Jr., “Letters to the People,” *New Orleans Tribune*, July 25, 1865.